

アルベール・カミュ、その愛の記録

——『カミュ・カザレス往復書簡集一九四四〜一九五九』——

東 浦 弘 樹
とうら

日本はいつの間にかこれほど「倫理」にうるさい国になってしまったのだろうか。

二〇一七年はタレントのベッキーとゲスの極み乙女のボーカル川谷絵音に始まって、芸能界・政界で多くの不倫が世間を騒がせた。筆者は「英雄色を好む」、「浮気は男の甲斐性だ」という前時代的な意見に与するものではないし、不倫がいいか悪いかと尋ねられれば、悪いと答えざるをえない。しかし、不倫をした人間をこれでもかこれでもかと総出で叩く昨今の風潮には疑問を感じずにはいられない。

二〇一七年十一月、フランス・ガリマール社からアルベール・カミュとマリア・カザレスの往復書簡集が出版された。千二百ページを超える大部のものである。カミュとカ

ザレスが長きに渡って愛人関係にあったことは、研究者の間では公然の秘密であり、勿論筆者も知っていた。

カミュは恋多き男であり、実際女にモテた。彼は四十六年の生涯で二度結婚しているが、結婚しているときも、していないときも、愛人が絶えることはなかった。興味深いことに、カミュは恋愛をテーマとした小説や戯曲は全くと言っていいほど書いていない。『異邦人』にしても『ペスト』にしても『転落』にしても、はたまた『カリギュラ』にしても『誤解』にしても、恋愛に割かれている部分は極めて小さく、『異邦人』のムルソーなどは、恋人のマリイに「私を愛してる？」と聞かれて、二度に渡って「愛していない」と答えるほどだ。かろうじて戯曲『正義の人々』が帝政ロシア末期のテロリスト、キャリアエフとその同志

であるドーラの恋を描いていると言えるが、芝居そのものはセルゲイ大公暗殺をめぐるテロリストたちの葛藤を描いたもので、恋愛が中心テーマであるとは言い難い。

恋多き作家が自作の中でほとんど恋愛に触れていないというのは、一見奇妙に思えるかもしれない。しかし、モテる男、実人生において恋人に不自由していない男は恋愛について語らないものだ。醜男で全くモテなかったスタンダールが二つの偉大な恋愛小説『赤と黒』と『パルムの僧院』を書き、かの有名な『恋愛論』を書いたという例をひくまでもなく、恋について語るのはモテない男というのが相場である（かくいう筆者も『フランス恋愛文学をたのしむ——その誕生から現在まで』という本を書いている。推して知るべしというところか）。

カミュはまだアルジェ大学文学部の学生だったとき、シモーヌ・イエという女性と恋に落ち、友人のマックス・ポール・フーシエから奪うような形で結婚した。一九三四年六月十六日、カミュ二十歳の時である。しかし、この結婚はうまくいかなかった。一九三六年夏、夫婦が友人のイヴ・ブルジョワと一緒に中央ヨーロッパに旅行に行った際、麻薬の依存症であったシモーヌが薬欲しさにアルジェ在住

の医師と関係を持っていたことが発覚し、ふたりは帰国後すぐに別居することになったのである。翌一九三七年に刊行した処女エッセー集『裏と表』の「魂の中の死」で、カミュはこの旅行中滞在することになったチエコスロバキアのプラハでの孤独と不安に満ちた数日を描いている。エッセーの中にはシモーヌや彼女の不貞に関する記述は一切ないが、伝記と照らし合わせるならば、彼の孤独と不安がどこから来るかは明らかである。

カミュがのちに書いた戯曲『誤解』は、若い頃家出した男が金持ちになって実家に戻って来る、実家は宿屋を営んでいたので男はひとり旅の宿泊客のふりをする、彼が誰だか見抜くことができなかつた母親と妹は金を奪うために男を殺してしまうという悲惨なストーリーで、ユーゴスラビアで実際に起きた事件をもとにしているが、カミュはこの物語の舞台をユーゴスラビアからチエコスロバキアの小村に移している。それもまたシモーヌの不貞の発覚とプラハ滞の辛い思い出が影響していると考えることができるだろう。

カミュはその後、一九四〇年十二月、二十七歳のときにフランシーヌ・フォールと再婚した。一九四二年五月には

『異邦人』が、十月には『シーシユポスの神話』がガリマール社から出版されるが、それに挟まれる形で、カミュは同年八月、十七歳のときに罹患した結核が再発したため、妻とともにフランス中央山脈の村ル・パヌリエに赴き、療養生活を送ることになる。そして同年十一月、フランシエヌがオランの実家に一時戻ったときに、連合国軍が北アフリカ上陸作戦を開始したため、フランス本国とアルジェリアの間の交通は遮断され、カミュと妻は一九四四年十月まで二年近くに渡って別離を余儀なくされた。

この経験は一九四七年に出版された小説『ベスト』に新聞記者ランベールとその恋人の別離と再会として取り入れられることになるが、カミュはその二年間何をしてきたのか——彼はレジスタンスの地下新聞『コンバ（戦闘）』の編集に携わる一方で、戯曲『誤解』をパリのマテユラン座で上演し、マルタ役を演じた新進女優マリア・カザレスと愛人関係になっていた。

カミュとカザレスは一九四四年三月十九日にパブロ・ピカソの戯曲『尻尾をつかまれた欲望』を朗読劇としてミシエル・レリス夫妻の家で上演した際に顔を合わせていた。その後、カミュは『誤解』のマルタ役をカザレスにオファ

ーし、その稽古中に（『カミュ・カザレス往復書簡集』の編者ベアトリス・ヴァイヤンは六月六日の夜と断定している）ふたりは愛人になった。

マリア・カザレスは一九二二年十一月二十一日にスペインのラ・コロニーユで生まれた。カミュは一九二三年十一月七日生まれなので、ふたりが出会ったとき、カミュは三十歳、マリアは二十一歳である。マリアの父親サンティアゴ・カザレスはスペイン第二共和政の首相であったが、フランコ將軍の蜂起により辞職を余儀なくされ、一九三六年十一月二十日家族を連れてフランスに亡命した。マリアは演劇を志して、パリのコンセルヴァトワールに通い、輝かしい成績で卒業した。マリアはその後、順調に経歴を積み、舞台女優として大成しただけでなく、マルセル・カルネ監督の『天井桟敷の人々』（一九四五年）やジャン・コクトー監督の『オルフェ』（一九五〇年）、『オルフェの遺言』（一九六〇年）など映画にも出演し、国際的な女優となるが、このときはまだ駆け出しの女優であった。

ふたりの関係は、カミュの妻フランシエヌが夫と合流し、さらには妊娠が発覚したことにより一時途絶えるが、その四年後（これまたベアトリス・ヴァイヤンによれば、

一九四八年六月六日)、ふたりはパリのサン・ジェルマン大通りで偶然再会し、よりを戻している。その後、ふたりの関係は一九六〇年一月四日、カミュが交通事故で死去するまで十二年に渡り続いた。その間カミュはフランシーヌとの離婚を考えることなく、カザレスの他に愛人を持ったこともある。しかしそれでも、彼にとつてカザレスが「生涯の女性」であつたことは動かしがたい事実である。

カミュの妻フランシーヌは夫の不倫をどう思つていたのだろう。フランシーヌは無論、夫の行状を知らないではなかつた。しかし、彼女はそれを見えるようなタイプ的女性ではなかつたし、だからといって夫を責め、自分から離婚を要求するようなタイプの女性でもなかつた。フランシーヌはただ黙つて耐えるだけで鬱々とした毎日を送り、窓から飛び降りて自殺を図つたこともあるという。『アルベール・カミュ、ある一生』の著者オリヴィエ・トッドによれば、彼女は夫の小説『転落』を読んだ際、橋から身を投げる黒服の女性は自分だと語つたそうだ。これはある意味、衝撃的な証言である。

『転落』(一九五六年)はジャン・バティスト・クラマンズと名乗る男がアムステルダムの場合のバー「メキシコ・

シティ」でたまたま隣り合わせた男にひたすら話をするという設定の物語である。クラマンズはかつて高名な弁護士としてパリで何不自由ない生活を送つていた。ところがある夜、セーヌ川にかかる橋ボン・デ・ザールを渡つているとき、黒い服を着た女性が川に身を投げた。クラマンズは彼女を助けるために何かしなければならぬと思ひながらも体が動かさず、何もなかつたことにしてその場を立ち去る。しかし、彼はそのことで自分が許せなくなり、仕事をやめパリを捨ててアムステルダムの場合のバーまで流れてくることになる。

『転落』は罪の意識と贖罪をめぐる物語である。カミュがなぜそのようなテーマを取り上げたのかは、一般には彼の戦中・戦後の経験、特に対独協力者粛清の問題によつて説明されることが多い。カミュは当初、ナチスドイツに協力したフランス人、いわゆる「コラボ」に厳罰をもつて処することを主張し、「寛容」の精神を説くカトリック作家フランソワ・モーリヤクと論争もしている。だが、対独協力の罪で死刑を宣告された作家ロベール・ブラジャックの減刑嘆願書に署名を求められて、煩悶の末署名している。しかし、嘆願書も虚しく、ブラジャックは一九四五年二月

六日に処刑された。こうした経験から、カミュは『転落』で「正義」の名の下にひとりの人間を死なせることに同意した、あるいは同意しかなかった自分を悔いているというのである。

筆者は必ずしもそのような読み方を支持するものではない。しかし、いずれにせよ、もしフランシーヌの言うことが正しいならば、そのような解釈は根底から覆ってしまふ。『転落』にみられる罪の意識の問題は、カミュの政治的姿勢から来ているのではなく、極めて個人的な体験、すなわち自分が平然と妻を裏切っていること、そのために妻が飛び降り自殺を図ったことに対する罪悪感から来ていることになるのだ。

いや、それを言うなら、先に触れた『ペスト』の新聞記者ランベールについても、読み方が変わってくる。ランベールはパリで待つ恋人に会うために、ペストで閉鎖されたオランの町を非法法的手段で抜け出そうと奔走する。しかし、死の危険を冒してペストと戦うボランティアグループを間近で見ること、彼の中で何かが変わり、町に残ってペストと戦うことを決意する。ペスト終息が宣言され、町の門が開かれる日、町が歓喜で湧き返る中、ランベールは

恋人と再会する。しかし、恋人を出迎えるランベールの心は決して喜び一色ではない。

彼「ランベール」は伝染病の最初の頃、一気に町を飛び出し、愛する女性の方へ駆けて行きたいと思った自分に戻りたいと願った。しかし、それは不可能だとわかっていった。ペストは彼の中にある放心をおき、彼は変わったのだ。彼はそれを全力で否定しようとしていたが、それは鈍い不安のように彼の中で続いていた。ある意味では、彼はペストがあまりに突然終わってしまったと感じていた。幸福は全速力で近づいており、出来事は期待よりも早く進んでいた。ランベールは全てが一拳に彼に返されるだろうということ、喜びとは火傷のようなものであり、味わうことができないものだということを理解していた。(『ペスト』第5部)

彼は恋人を抱きしめながら、「彼の肩のくぼみに埋められた」恋人の顔が「あれほど夢みた顔なのか」、それとも「見知らぬ女性の顔なのか」といぶかる。

この一節は、人間の心というものは単に別離／再会、悲

しみ／喜びという二元論で語り尽くせるものではないということ、あまりにも長く激しくひとつの願望を持ち続けた場合、その願望が実現するときには人は途方にくれて、どう反応すればいいかわからなくなってしまおうということを表しており、カミュの作家としての力量を如実に示す箇所であると筆者には思えるが、もし恋人を出迎えるランベールと妻フランシーヌを出迎えるカミュを同一視するのであれば、全く見え方が違ってくる。ペストがランベールの中においた「放心」とはマリア・カザレスとの恋のことであり、それがあからこそランベールは（あるいはカミュは）恋人との（あるいは妻との）再会を素直には喜べないということになってしまふのだ。

しかし、『転落』にせよ、『ペスト』にせよ、そのような読み方が正しいとは筆者には思えない。たしかに、作者の人生、伝記的事実を知ることが作品の理解に大きな貢献を果たすことはある。しかし、それが全てではない。カミュが妻の自殺未遂や自身のカザレスとの恋に着想をえて『転落』や『ペスト』の該当シーンを書いたとは筆者には思えないが、百歩譲ってそうだとしても、作品をそのような伝記的事実に還元することは、文学を卓小な現実に引き下げ

るだけであり、カミュの作品が持つ射程をいたずらに狭めることではないだろう。カミュの作品はどれも現実に根ざしている。しかし、現実に根ざしながら、無限に現実を超えて、人間や世界についての深い洞察にいたるところがカミュの作品の特徴であり素晴らしさなのである。

では、カミュ研究の立場から考えると、『カミュ・カザレス往復書簡集』はどう捉えるべきであろうか。カミュは生涯、日記というものをつけなかった。ガリマール社から出版され日本語に翻訳もされている彼の『手帖』はあくまで創作ノートであり、そこから彼の私生活をうかがうことは難しい。その意味では、『カミュ・カザレス往復書簡集』はカミュの知られざる一面を教えてくれると言っても決して嘘ではない。また、個人的な手紙とはいえ、その文面には随所にカミュらしい記述が見受けられるというのも本当である。しかし、筆者が何より強く感じたのは、カミュもまたひとりの男だということだ。

男でも女でも恋する人間はみな滑稽である。カミュとて決して例外ではない。『カミュ・カザレス往復書簡集』は一九四四年六月からカミュの事故死直前の一九五九年十二月

三十日までの八六五通の手紙が収められているが、例えば一九四四年七月、ふたりが愛人関係になってまだ間もない頃、レジスタンスの地下新聞『コンバ（戦闘）』の編集に携わっていたカミュが身の危険を感じて、セーヌ・エ・マルヌのプリス・パランの持ち家に身を隠していたとき、カミュはカザレスに会いに来てくれと頼み、なぜ来てくれないのか詰ったり拗ねたりしている。まるで駄々っ子としか思えない。

一方のカザレスはというと、『カミュ』カザレス往復書簡集』の序文を書いているカミュの実娘カトリーヌ・カミュは、スペイン人である彼女の綴りの不正確さを指摘しているが、文章は確かであり、豊かな知性を感じさせる。彼女は自分が忠実であるところを見せてカミュを安心させるためか、それともそういう打ち明け話をしてふたりの絆を確かめるためか、自分に言い寄ってくる男性をどのようにあしらったかを手紙に書き、さらにはジェラルド・フィリップから貰ったというラブレターめいた手紙を同封してカミュに送ってさえている（ただし、カザレスはその手紙を送り返して欲しいと書き、カミュはその通りにしたので、それがどのような手紙だったのかはわからない）。

いい気なものだと言いたくなるが、本人たちは大真面目なだけに余計滑稽である。ただ、それは読み手次第なのかもしれない。例えば、ふたりがよりを戻してから二ヶ月後、一九四八年八月十二日（木曜日）付けの手紙に、カミュは次のように書いている。

君は僕の人生の中で君には立ち入れないと思える部分について僕が話したことが嬉しいと言う。いとしい人よ、君にとつて壁も秘密の庭も僕の中にはない。君が全ての扉の鍵を持っているんだ。

筆者はこの一節を読んで思わず吹き出してしまったが、四十代の女性の同僚に見せたところ、彼女は「素敵ですね」とうっとりしていた。筆者が不粋なだけなのだろうか。わからないものである。

カザレスは『誤解』を皮切りとして、『戒嚴令』（一九四八年）、『正義の人々』（一九四九年）に出演したほか、カミュが翻案したカルデロンの『十字架への献身』（一九五三年）、ラリヴェイの『精霊たち』（一九五三年）にも出演している。筆者が『カミュ』カザレス往復書簡集』に期待

したのは、偉大な劇作家と偉大な女優がどのようにしてともに芝居を作ったか、カザレスはカミュの戯曲をどう読み、どう理解したか、カミュはカザレスの演技をどう捉えたかをそこに読むことであつた。しかし、そのようなことは『カミュ・カザレス往復書簡集』には書かれていない。一緒に仕事をしているときには、毎日のように顔を合わせているのだから、手紙を書く必要はないからだろう。当たり前と言えば当たり前のお話である。『カミュ・カザレス往復書簡集』に書かれているのもっぱら、会いたいのにお会いしない悲しみであり、今度いつ会えるかを相談するふたりのやりとりであり、ふたりの間で交わされる愛のことばである。

その意味では、『カミュ・カザレス往復書簡集』は意外なほど明るく楽天的である。意外なほど書いたのは、カミュの晩年は決して幸福なものではなかったように思えるからだ。一九五二年にはまず所謂カミュ・サルトル論争があつた。その前年にカミュが発表した政治的エッセー『反抗的人間』に関してフランシス・ジャンソンが雑誌『レ・タン・モデルン（現代）』に批判的な書評を書いた。それに腹を立てたカミュはジャンソン宛ではなく、『レ・タン・モ

デルヌ』の編集長宛に抗議の手紙を書いた。編集長は誰だろうジャン・ポール・サルトルであつた。こうして始まつた論争は哲学論争でも文学論争でもなく、明らかに政治論争であつた。

今の若い人たちにはなかなかわかつてもらえないことだが、サルトルもカミュも、彼ら以外の左翼系知識人たちが、社会をよくしたいと願つており、そのためには革命が必要であり、革命には暴力が不可避だと考えていた。その点では彼らは一致していたが、そこから先が違った。サルトルは目的は手段を正当化すると考えていたが、カミュは暴力は必要だが、それを正当化した瞬間から革命は墮落すると考えていたのである。カミュが理想としたのは、『正義の人々』に登場する「心やさしきテロリストたち」、帝政ロシア末期にセルゲイ大公の暗殺を計画したが、大公の馬車に子どもが乗っていることに気づき、寸前で爆弾を投げることを諦めたカリヤーエフと、彼の決断を支持した仲間たちである。カリヤーエフはその二日後、再び大公の乗った馬車を待ち、今度は大公ひとりだけだったので、爆弾を投げて暗殺に成功する。そして彼は予てからの計画通り、従容として絞首台に上る。ひとつの命を奪つた人間は

自分の命でそれを償わなければならないというのが彼らの考えなのである。

今日ならばカミュの考えを支持する人間も少なくないだろう。しかし、一九五二年当時、そのような人間は皆無だった。そのためカミュは文壇で孤立を深めていく。さらに追い討ちをかけるように、一九五四年にアルジェリア戦争が始まった。多くの人々がアルジェリア出身のカミュの発言を期待した。しかし、カミュに何が言えただろう。カミュ自身はフランス人とアラブ人、ベルベル人が対等の権利を持つ形でアルジェリアが一定の自治権を持つことを望んでいたようだが、とてもそんなことが言える状況ではなく、カミュは一九五六年一月アルジェで市民休戦（一般市民を対象とした無差別テロの停止）を求めるアピールを行って以降はアルジェリア問題について沈黙を守り、独立賛成派からも反対派からも非難を受けることになった。

一九五七年十月、ノーベル文学賞が与えられたことはカミュにとって大きな栄光であるはずだが、彼を敵視する人々にとっては彼を攻撃し、「終わった作家」として貶める格好の機会となった。同年十二月、ストックホルムに赴いたカミュが学生との討論会に出席した際、アラブ人の青

年がアルジェリア問題についてカミュを問いただし、カミュが「私は正義を信じる。しかし、正義より前に私の母を守るだろう」と答えたことは有名である。母親がアルジェに住んでいるカミュからすれば当然の発言だが、彼を批判する人々はそれすらも問題視した。（ちなみにこの時期の『カミュ・カザレス往復書簡集』には、ノーベル文学賞受賞の知らせを聞いたカザレスがカミュに「なんとという祭り／若い勝利者／なんとという祭り」という電報をうち、カミュが「これほど君がいなくて寂しいと思ったことはない」と返信しているほか、カミュが書いたごく短い手紙が二通あるだけである。カミュはカザレスに手紙を書く暇さえないほど忙殺されていたのだろう。）

そのような経緯からか、一九六〇年一月四日、カミュが交通事故で死去したときには、自殺ではないかということが噂された。勿論、運転していたのはカミュではなく（彼は運転免許を持っていなかった）、彼の親友のミシェル・ガリマールである。しかし、助手席に座っていたカミュが何かをして運転を誤らせることも理論的には不可能ではない。実際、カミュは人生の中で何度か自殺の誘惑に駆られたことがあるらしく、一九四九年に南米を訪れた際につけ

た旅日記の七月一日の項には「二度に渡って自殺の誘惑。二度目は、相変わず海を眺めながら、こめかみに焼け付くような痛みが走る。人がどのようにして自殺するのかいまいやわかるような気がする」と書いているし、一九五〇年四月の『手帖』には「Aの自殺。私が動揺したのは無誤論、彼を好きだったからだだが、それはまた自分が彼のようにすることを欲しているということと突然理解したからでもある」と書いている。

しかし、『カミュ・カザレス往復書簡集』はそのような噂を根本から否定するものである。カザレスに宛てた最後の書簡となった一九五九年十二月三十日付けの手紙に、カミュは「ガリマール夫妻と一緒に火曜日に車でパリに戻る」、「着いたらすぐに電話するので、一緒に夕食をとろう」と書き、「君に会えることを思うととても嬉しい。僕はこの手紙を書きながら笑っている」と書いている。人間というのはわからないもので、さつきまで笑っていた人が次の瞬間に泣き崩れることもありえないことではない。しかし、そんなことを書く人間が数日後に自殺するだろうか。

カミュはこの手紙を次のように結んでいる。

だから僕にはもう君の笑顔や僕たちの夕べや僕の祖国を自分に禁じる理由はない。君にキスを送り、火曜日まで君をこの胸に抱きしめている。火曜日にまた始めるのだ。

カミュはパリに戻ってカザレスを抱きしめるつもりだった。そして人生を「また始める」つもりだった。カミュがカザレスの「笑顔」やふたりで過ごす「夕べ」と「祖国」を同列においているのは興味深い。そのとき彼は戦争で引き裂かれたアルジェリアのことを考えていたのだろうか。それとも、彼にとってはカザレスこそが「祖国」だと言いたかったのだろうか。いずれにせよ、「また始める」という彼の望みは永遠に叶わないことになってしまう。運命の皮肉と残酷さを感じずにはいられない。

最後に一九五九年七月二日付けのカミュの手紙の一節を紹介しておこう。前々日付けの手紙でカザレスが「死が私たちを分かたななことがありえるものかしら」と書いたことに対する返答として、カミュは次のように書いている。

いいや、死はふたつを分かつてではなく、すでに魂まで結ばれていたふたつの体をそれまで以上に地上の風に混ぜ込むんだ。互いに向き合った女と男であったものが、昼となり夜となり、大地となり空となり、世界を構成する物質そのものとなる——生きている間は、互いを忘れ、顔を背け、別れることもある。生というのは忘れっぽいものだ。——しかし、死は終わることのない盲目の記憶だ——ともに死ぬことを望み、それに同意する者たちにとっては。

人間と世界の幸福な一体化を語る非常にカミュ的な文章である。カミュがこの時点で自らの死を予感していたとはとても思えないが、それでもここに何か予兆めいたものを感じるのには筆者だけではないだろう。

筆者はカミュとカザレスの恋を実際以上に美化するつもりはない。しかし、これほど強く長く愛し合ったカップルは稀であるだろうし、たとえ不倫の恋であっても、美しい恋であったことは誰にも否定できないであろう。

カミュの死後、悲嘆に暮れるマリア・カザレスを慰める

ために、彼女の友人たちは別荘を買うことを勧め、一九六一年八月五日、カザレスは歌手のアンドレ・シュレツセルと共同名義でフランス南西部のアルーに屋敷と地所を購入した。一九七八年六月二十七日、カザレスはシュレツセルと結婚し、パリ十四区のアスリーヌ通り六番地で暮らした。

マリア・カザレスは一九九六年十一月二十二日、七十四歳で逝去した。彼女はアルーの墓地に埋葬され、夫シュレツセルの隣で眠っている。

後記

『カミュ・カザレス往復書簡集』からの引用は Albert Camus, *Maria Casarès, Correspondance 1944-1959*, Texte établi par Béatrice Vaillant, Avant-propos de Catherine Camus, Gallimard, 2017 に依る。また文中の翻訳は全て筆者によるものである。